

## 慶應義塾大学先端生命科学研究所の研究成果等に係る第2期最終評価（概要）

### 1 趣旨

慶應義塾大学先端生命科学研究所への第2期支援期間（平成18～22年度）の最終年次であることから、これまでの研究成果等について有識者による評価を実施

### 2 評価委員

赤塚 孝雄 山形県立産業技術短期大学 校長 山形県科学技術会議 会長  
大石 道夫 財団法人かずさDNA研究所理事長（兼）所長  
長平 彰夫 東北大学大学院工学研究科 教授

### 3 評価結果

#### （1）総合評価 非常に優れている（5段階評価で最も高い評価）

これまでのメタボローム解析技術に関する研究成果について高く評価できる。今後も研究の優位性を維持、発展させるよう期待する。

#### （2）主な評価コメント

##### ① 研究の進捗状況、研究の成果

第2期に、細胞の代謝物を網羅的に測定できるメタボローム解析技術について、解析能力の向上が図られ、これを活用した研究が展開し各種疾患バイオマーカーを発見するなど、多くの研究成果が得られている。システム生物学の基盤確立に寄与したことによって、この分野の世界的な拠点の一つとして認識され、生命科学、特に医療バイオ分野等にその応用場が広がっているのは高く評価できる。

##### ② 今後の研究方向

「健康」をキーワードに、メタボローム解析を駆使した次世代健康診断の開発、各種疾患バイオマーカーの発見、農産物など食品の健康機能性成分の解析などの研究方向への展開は適切。

##### ③ 事業化

基礎研究分野が中心である研究所から競争力の高い大学発ベンチャー企業が第1期に続き、第2期も生まれていることは特筆すべき成果である。今後の商業化への活動に期待。

##### ④ 地域貢献

国際学会、全国的な規模の学会の誘致や定常的な開催を進めており、全国の高校生を対象にした科学キャンプ、地元の高校生を研究助手として採用するなど、研究・教育において斬新で確固とした取組みを評価。共同研究などでのさらなる企業参加が望まれる。

##### ⑤ クラスタ形成

多くの研究機関との共同研究、連携、海外を含む企業との共同開発などを通じて知的集積が進展。文科省事業等の実施により、一層の知的クラスター形成が期待される。